

匠

たくみ

「日本の文化は、江戸時代まで」と言われることがあります。これは、それまでの日本の文化が大陸や朝鮮半島の影響を多少受けたにしても、日本独自で創造された文化であったことを表しており、それだから奈良・京都が外国人旅行者に人気なのではないでしょうか？しかし、それらの文化、特に建築物から民芸品などについては、代々「匠の技」を受け継いできた職人がいたにもかかわらず、後継者不足などにより年々、その数が減少してきているのが現状です。

このコーナーでは、「匠の技や職人芸」などをいまだに受け継いでいる方々やそれに関する情報などを紹介します。

「剣道=(イコール)人生」

●剣道具をつくり続けて30年 真谷 繁美さん(枝川在住)

■皆さんは「剣道」というと、日本古来の伝統的文化で、「剣の理法の修練による人間形成の道である」とイメージすると思います。しかし、この剣道をはじめ、柔道・弓道など日本古来の武道がGHQの占領政策により、禁止・制限措置がされ、それが1953年にやっと解除されたことをご存知でしょうか。そんな中、現在でも手づくりでこだわり剣道具の製造・修理を手掛けているのは、枝川在住の真谷繁美さん。真谷さんは、戦前からそれを家業とする家に生まれ、剣士でもあった父親の仕事をする姿を見、いつのまにか自分もその世界に入っていたそうです。■「幼少の頃から、自分も剣道をやっていたせいか、すんなりこの道に入れたけれども、そうは言っても手づくりの成す職人技。もう30年近くやっても、なかなか自分で完全に納得したものではないのですよ。ちょうど毎日毎日が勉強で、これこそ自分にとっての「生涯学習」と真谷さんは言います。手づくりの良さは、とにかく既製品より、その人にあったサイズのものが出来、長持ちすることで、時には自分の父親が以前につくった物を修理することもあるそうです。■「剣道は人生そのものであり、生活の一部。その人口が年々減少し続けていることは寂しい。しかし、剣道をはじめとする武道こそ、今忘れられている道徳・礼儀を教えてくれるだけでなく、精神力も育むもの。今の自分があるのも、剣道のおかげ。」と言い、さらに真谷さんは続けます。「現在では、ピアノや学習塾といった“塾”の一種として剣道は捉えられているかもしれない。でも、剣道からは、知識とか技術だけでなく、本当は礼儀・作法と言った精神的な面を学んで欲しい」と。

最近、子供のいじめや自殺などの問題がクローズアップされています。こんな無秩序な時代だからこそ、真谷さんのように日本古来からの武道の1つである“剣道”を単にスポーツとか文化として捉えるのではなく、「人間形成の場」でもないと捉えていくことも必要なのではないでしょうか。



使う人のことを思い、
真心をこめてつくることが
「手づくりの良さ」。
それは使った人にはかならず伝わるもの。



伝統芸能 “元町みろく” 「元町みろく」は、天満宮の祭礼の風流物として長い間受け継がれてきました。

この「みろく」に関する起源や由来についての文獻は残っていないため詳細については明らかではありませんが、「みろく」とは一般的に竹竿の先に人形をつけたもので、元町の場合、白・青・赤の桐製の人形が3体あります。

3体のみろくの演舞は、お祓いとお神楽をあげることや祝詞をあげる神事であり、内容は、天照大神がスサノオノミコトの暴状を怒り、天の岩屋に籠ったため、天地が闇夜となったので、八百万の神々が相談して、種々の物を飾り、アメノコヤネノミコトが祝詞を奏し、アメノウズメノミコトが舞ったところ、天照大神が岩戸を少し開いて顔を出したとき、タチカラオノミコトが岩戸をひき、世が明るくなったという神話です。

また、この3体のみろくの顔は、いずれも滑稽で、ユーモラスなものであり、それは神々の面、すなわち「おもて」をつけて踊る姿を表現しているもので、特に天の岩戸の前庭での舞は、大神を岩戸より引き出すのが目的だったため、そのような顔にしていると言われていました。

この「元町みろく」の人形は、木の棒の先に取り付けられ、底無し（すきぞこ）の屋台の中で振り方によって操られるもので、鉦（しょう）や笛、太鼓の囀りに合わせて、体を動かして踊るものですが、他地域のみろくとは異なり、一体ずつ踊るところが特徴的です。人形は、向って右に住古さん（白）、中に春日さん（青）、左に鹿島さん（赤）であり、住古さんが、お祓いをして災厄を除き、春日さんが太鼓を叩いてお神楽をあげ、鹿島さんが背に南ばんを背負って、悪霊悪疫を払う祝詞をあげる神事を行うのです。

